

「全一」を哲学とした フランク・ロイド・ライトの高弟。

アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトの高弟として知られている遠藤新は、東京・東久留米の自由学園の校舎群（1929）や甲子園ホテル（1930）などを設計した建築家で、福島県宇多郡福田村（現在の相馬郡新地町福田）出身。明治22年（1889）6月4日に生まれ、相馬中学校、第二高等学校を経て大正3年（1914）に東京帝国大学工科大学建築学科を卒業した。

大正4年（1915）1月の読売新聞に掲載された、東京駅（設計者は建築界の大御所、辰野金吾）についての遠藤の論評「東京停車場と感想」に、「全一なる対象として建築を考へる」というくだりがある。この「全一」（完全に統一していること）「広辞苑」は、遠藤が生涯を通して貫いた建築哲学であった。このことは、たとえばフランク・ロイド・ライトと遠藤新の二人の名前による「自由学園の建築」（『婦人之友』1922年6月号）という文章にも見られる。「いま、乙女達の校内に群れて、花の木を飾るに似たるを見ては、誠に欣びに堪えません。生徒はいかにも、校舎に咲いた花にも見えます。木も花も本来一つ。そのように校舎も生徒もまた一つに。」

また「住宅小品十五種」（『婦人之友』1924年5月号）のはしがきの「部分が相済す美しさ、それがまた全体に参する美しさ、そして更に全体が部分に及ぶ美しさ」というくだりにも、彼の建築哲学の一端を見ることが出来る。

大正4年（1915）に明治神宮造営局に奉職した遠藤は、大正6年（1917）1月8日にライトに出会う。帝国ホテルの支配人であった林愛作を紹介して、ホテル建設のスタッフとしてホテルの建設に従事するためであった。

大正8年（1919）に着工した帝国ホテルの工事は、未完成のまま大正11年（1922）夏に帰国したライトの後を受けて、遠藤を中心とした日本人スタッフにより大正12年（1923）8月末に竣工。完成披露の9月1日、関東大震災に見舞われた。

「山邑別邸」の建築。

学生の頃、遠藤は東京帝国大学基督教青年会館に暮らし、ここで親友となる星島二郎と出会う。星島は犬養毅の秘書を経て代議士となった人物で、戦後は衆議院議長を務めた。山邑別邸（現・ヨドコウ迎賓館）は「ライトのスケッチ」により遠藤と



満州中央銀行倶楽部 外観



上代淑(かじろ よし)邸



甲子園ホテル 外観



梁瀬自動車本社ビル



右から林 愛作、ライト、遠藤 新(帝国ホテル現場事務所)



飯能繊維工業 食堂



山陽高等女学校

主な作品

- 1920 吉野作造邸書斎(増築)
- 1921 日本女子大学「櫻楓会アパートメントハウス」(東京)
- 1922 犬養木堂邸(東京)
- 1924 山陽高等女学校の校長 上代淑(かじろ よし)邸(岡山)
山邑太左衛門別邸
(兵庫/基本設計:F.L.ライト、実施設計:遠藤新・南信)
- 1925 山陽高等女学校校舎増設(岡山)
- 1928 加地利夫別邸(東京)
- 1929~ 自由学園校舎群
(東京/初等部校舎・東天寮【男子寮】・清風寮【女子寮】など)
- 1930 甲子園ホテル(兵庫)
賛育会病院(東京)
- 1931 小塩次郎邸(東京)
加地利夫邸(東京)
梁瀬自動車本社ビル(東京)
- 1935 満州中央銀行倶楽部(中国)
- 1943 日満育英会如蘭塾(佐賀/国登録有形文化財)
- 1950 目白ヶ丘教会(東京)
飯能繊維工業事務所(埼玉)
- 1951 飯能繊維工業 食堂(埼玉)
他多数



Arata Endo
1889-1951
遠藤 新

『建築家・遠藤 新』

特集
建築の行者 ~その生涯と思想~

フランク・ロイド・ライトに“MY SON”(我が息子)と呼ばれた愛弟子(遠藤 新)。今号ではライトの高弟として、ヨドコウ迎賓館をはじめ数多くの建築を手掛けた遠藤に焦点を当て、経歴や建築哲学を通してその人物像に迫ります。



文化学園大学短期大学部 教授
井上 祐一様
いのうえ ゆういち

1951年 兵庫県三木市生まれ。神奈川大学工学部建築学科卒業。工学院大学大学院 工学研究科博士後期課程 建築学専攻修了 博士(工学)。文化学園大学短期大学部 教授。アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトの日本における影響や、大正期・昭和初期の住宅について当時の認識と現代の住宅を通して今後の住まいのあり方を考える。



棟札



山邑邸 建設現場

遠藤のパートナーであった南信が実施設計したもので、星島の夫人雛子は、8代目山邑太左衛門の長女であることから、設計依頼の道筋は想像がつく。南信が、大正12年（1923）春に住居を東京から芦屋に移転して現場での仕事を一手に引き受け、遠藤は東京で帝国ホテル完成に向けて、そしてホテル完成後は震災の復旧の仕事に力を注いでいたと考えられる。

山邑別邸の棟札によれば、上棟は大正13年（1924）2月11日であり、竣工は同年後半とされている。推測の域は出ないものの、遠藤は帝国ホテルの竣工後、震災の復旧活動の時期に芦屋の現場を訪れ、工事の進行状況等を見ていたと考えられる。というのも、岡山で2つの仕事が進んでいたからである。一つは大正13年（1924）2月9日に竣工した住宅、もう一つは同年7月に起工し、翌年3月に竣工した学校建築である。つまり、岡山での作品の設計及び建設は、山邑別邸の工事期間と重なっていた時期があったということになる。

命を削って取り組んだ学校建築。



若柳中学校

昭和8年（1933）に旧満州（中国東北三省）での活動がはじまり、遠藤は終戦まで新京（長春）の事務所を拠点に仕事をした。そこでは新京の帝国ホテルとも呼ばれた満州中央銀行倶楽部（1935）をはじめ、個人住宅など多数の建築を手がけた。

昭和21年（1946）11月に帰国した遠藤は、心臓病のため入院を繰り返しながら、戦後の新制中学校の校舎の設計に対する提言を行った。文部省の設計した設計図の改良案を所員一丸となって数十件作成したという。

満州で遠藤の右腕として働いた山崎 忠夫（元満州中央銀行建築科）は、昭和28年（1953）に発行された『新しい学校建築』の中で次のように述懐している。

「教育建築へ死をかけた人、故遠藤新。日本の正しい教育建築に尽くすこと三十余年。六三制以前は官僚の圧迫のもとに苦勞と忍耐を重ねながらも、少しもその主張を曲げずじりじりとその実現に努力し来た人である。」そして、3つの中学校の計画を中止するようにと訴える医師や近親者に対して、「教育建築の為には鉛筆を持たなければ私は死ぬ。お前たちは私を殺すのか」と云って、その忠告を少しもきかなかった。」

将来を担う子どもたちを育てる大切な環境である学校建築の重要性を訴え続け、環境としての建築を考え創作し続けた建築家・遠藤 新の最後のメッセージである。